性急な弁護人

――モンテーニュとロキ・コムーネス――

山　本　佳　生

はじめに

ルネサンス期の作家たちの精神形成に貢献したものといえば、まず「模倣 imitatio」が挙げられるだろう。ギリシャ・ラテンのすぐれた著者たちの文体を真似することで、みずからのラテン語能力を向上させ、さらにはその精神性までも獲得しようと試みた。人文主義者たちにとって「模倣」は古典作品に接近するための手段であり、同時に目的そのものであったともいえる。とりわけ、ラテン語散文において最高の模範とされたのが、ほかならぬキケロであり、彼の文体、そしてその精神をどのように模倣するかをめぐって、いわゆる「キケロ主義論争」が繰り広げられた[(1)]。

モンテーニュが属する世代は、こうした論争の後、そこで出された問題点を十分に知悉した世代であった。それゆえ、彼らはキケロの文体を盲従的に模倣するような、単純な方法を採るのではなく、一方ではその豊かさや華麗さを俗語に転移させ、他方では新たな散文のモデルを模索した。モンテーニュが『エセー』で実践したのはちょうどこの中間ともいえるものだ。自分のフランス語の文章を傷つけることなく、古典作品への敬意を表すために、彼は引用という方法を用いる。従来的な権威の引証としてではなく、自分の言論を引き立たせるための装飾、あるいは自分の言葉では言い表せない事柄を示す際の代用品として、引用文は『エセー』のなかで機能している。モンテーニュにとってなによりも重要なのは、古典の「模倣」ではなく、「適合」であり、この点において彼は「キケロ主義論争」におけるエラスムスの立場の継承者だといえる[(2)]。

他方、ルネサンスの教育をはじめとして、あらゆる分野においてその有効性が認められていたのが、「ロキ・コムーネスの方法」と我々が呼ぶ、特徴的な読書ノートの作成法である。これはあらかじめ徳やモラルに関わる見出し語ないし章タイトルによって整理された（カタログ化された）ノートに、読書から得た役立つ表現、記憶すべき範例、説得的な論拠などを抜粋し、適切な見出し語のもとに配列することである。これによってそのノートはいわば多くの素材がつまった宝庫として、読書や執筆に役立つことになる。当然、この方法はラテン語学習者である学生に、記憶力の増強や作文能力の向上といった利益をもたらす。それだけでなく、人文主義者たちにとっても、それは一方では批判的、分析的な読書を可能にし、他方では自分で作成したノートに蓄えら

れた素材を利用して執筆を行なうのに役立つ、必要不可欠な仕事道具であった。したがってロキ・コムーネスの方法は、読者が、事柄、範例に共通するトピックを見つけ、それによって様々な著者からの引用文を一つの「場所 locus」にまとめることで、効率良く古典や聖書の知識や表現を手にすることを可能にしたのだ。同時にこれは膨大な文書情報を整理、保存し、さらには検索もできる情報管理術としての側面も備えていた。こうした方法はその利便性ゆえに、宗派を超えて、いわば共通の教養として人文主義者たちのあいだに浸透していた[(3)]。

モンテーニュも時代の子であり、こうした術を熟知していただけでなく、いくつかの章はそれに則って書かれたかのような形跡が見られる[(4)]。だが、彼にとって世界は差異と多様性によって構成されており、共通のトピックによって事柄や行為をまとめるのは不可能である。それゆえ、情報管理術としてのロキ・コムーネスの方法は、モンテーニュの『エセー』に大きな影響を与えているようには見えない[(5)]。

というのも、そのような情報管理、テクストの整理方法は、実際のところ、プロテスタント陣営においてそのイデオロギーの確立と伝播に貢献したメランヒトンの考えに多くを負っているからだ。見出し語という一般化されたトピックによって、世界の事柄を分節化し、その真理である神を理解しようという考えが、この情報管理術の根底にある。他方、メランヒトンに先駆けてロキ・コムーネスの方法を示したのは、ほかならぬエラスムスであり、カトリック側のアイデアのほとんどは彼の影響下にあると言っていい[(6)]。

エラスムスは「ロキ・コムーネス」を見出し語ではなく、引用文それ自体と定義し（loci communes sive sententiæ）それらを配列する場所を「ロクス」と呼んだ。彼にとって「ロキ・コムーネスの方法」とは、引用文を様々なところから収集し、豊かに蓄えることにほかならない。それによって語彙、精妙な表現、事柄についての知識など、言論の素材を自分の記憶のなか、そしてノートに保存するのだ。これまで多くの研究がモンテーニュのレトリックはエラスムスに負ったものだと指摘してきた[(7)]。ロキ・コムーネス自体についてのモンテーニュの言及を見てもそれは明白である[(8)]。それゆえ、我々は情報管理という側面からではなく、むしろエラスムス的解釈からモンテーニュとロキ・コムーネスの関係を検討すべきであろう。ところで、モンテーニュは引用文の収集と保存の方法を知っていたはずだが、肝心のそうしたノートは見つかっていない。そもそもロキ・コムーネスのノートは、原典を所有できない学生や読書する暇のない人文主義者が利用するものである[(9)]。モンテーニュはといえば、その書斎に多くの原典を所蔵し、公務からの引退を済ませた身である。そのようなノートはあまり必要なかったと言えるだろう。彼は読書の際に気になった文章を、自分の『エセー』に直接書き込んでいた。つまり、『エセー』自体がロキ・コムーネスのノートの役割を果たしていたのだ[(10)]。

また、次のことを見落とすべきではないだろう。モンテーニュがまさに読書と執筆を行なっていた書斎の天井には、多くの格言や警句の類が刻まれている。これらはまさしくエラスムスが古典の知識獲得のために推奨した方法であり、刻まれている文章は彼が「ロキ・コムーネス」だと

定義した引用文にほかならない[11]。興味深いことに、天井の格言の多くは『エセー』のなかで最大、最長の章である第二巻12章「レーモン・スボン弁護」のなかで活用されている。これが意味するのは、同時代の著作家たちが自分のロキ・コムーネスのノートから執筆の素材を借りていたように、モンテーニュもまた書斎の天井から、この最長の章を書くのに引用文を転写していたのだ。つまり、書斎の天井もまたロキ・コムーネスのノートにほかならず、「レーモン・スボン弁護」の章はそれらが反映した貴重な章であるといえる。

この章のなかでモンテーニュがピュロン派懐疑主義を展開していることに多くの研究が割かれてきた[12]。ただ、この哲学的色合いは他の章では見られないことから、この章を執筆していた時期をモンテーニュの「懐疑主義的危機」とみる見方もある。だが、モンテーニュにとってピュロン派懐疑主義はそれ自体が探求の主題となっているのではなく、自分の論証を強化する手段以上のものではない。この章においては哲学と同程度、モンテーニュの説得の仕方、つまりレトリックが重要である。

この観点から、ロキ・コムーネスの問題と「レーモン・スボン弁護」を結びつけることは可能だろうか。見出し語による情報管理や、引用文の蓄積といったルネサンス特有の観点からこうした問題を扱うのは難しいかもしれない。だが、それらの元になっている古典レトリックにおけるロキ・コムーネスの意味は、本来的にその目的は説得を目指すものである以上、モンテーニュが行っている議論に合致するのではないだろうか。

我々はすでに他の箇所で古典レトリックにおけるロキ・コムーネスについて詳細に検討をくわえたが[13]、それをルネサンスの作品であるモンテーニュの『エセー』に適用することは時代錯誤だろうか。たしかに新たな意味をロキ・コムーネスに付け加えはしたものの、本質的に古典古代の復興であるルネサンスにおいて、古典レトリックはなおも現役であった。それゆえ古典レトリックにおける意味や解釈も含めた観点から考察することは正当であろう。その証拠に、キリスト教説教者が用いるレトリックについて論じた著作において、エラスムスがロキ・コムーネスを次の四つに分類しているのが見られる[14]。

(i) 両方の観点から主題を論じるもの（Loci dicuntur communes, quod ab vtraque parte tractentur）
(ii) 美徳を増幅し、悪徳を誇張するもの（amplificationes virtutum et exaggerationes vitiorum）
(iii) 論拠となるもの（sedes argumentorum)
(iv) 付帯性の総体、カテゴリー（quid omnino cuique rei accidat）

このうち最初の二つは論点を増幅拡充するためのロキ・コムーネスであり[15]、他方後者二つは、多くの場合「ロクス」と呼ばれ、論点を整理し、論証を組み立てるのに役立つ。本来であれば、前者二つと後者二つに分けて考察するべきであろうが、実際、この順番通りに分析することにあまり意味はないように思える。むしろ我々は「レーモン・スボン弁護」の論述の流れにしたがっ

てこれらのロキ・コムーネスの適用を見るべきだろう。そうなると、まず我々が目にするのは (i) である。紙幅の関係上、本稿ではこのロキ・コムーネスのみを扱うことにしたい。

1. *Loci communes in utramque partem*

理論的記述

このロキ・コムーネスは賛成や反対、是や非など異なる二つの観点から主題を論じる方法のことである。キケロは若年の著作『発想論』において、噂や拷問による自白など、疑わしさが残る議論について、より詳細に検討を加え、論じるための方法として説明しているが、後年の『弁論家について』では、その適用範囲が拡大しているのが見られる。

> もう一つのロキ・コムーネスは一般的な種類の議論について両方の観点から豊かに論じることのできるもののうちにある。これは今日、すでに述べた二つの哲学の学派に固有のもののようになっているが、かつては、議会で豊かに弁論を行なう方法を教えた弁論術教師のもとでも行われていた。実際のところ、我々は、徳、義務、善、正義、威厳、有用性、名誉、屈辱、褒賞、罰やその他同じ類のものについては、二つの対立する観点から論じる技術と能力を備えているべきである[(16)]。

このキケロの記述において注目すべき点が二つある。それは、(a)「一般的な種類の de universo genere」(b)「二つの哲学の学派に固有 propria duarum philosophiarum」という点である。

(a)「一般的な種類の de universo genere」。これが意味するのは、問題を一般性の次元において論じるということであり、なにか特定の問題を対象とするわけではないということだ。実際に挙げられている概念もそのように一般的であり、「誰かの」あるいは「何かについての」といった特定性が付帯しているわけではない。しかしながら、レトリックは本質的に特定の問題を論じる技術である。勧告、称賛、非難、弁護、いずれの弁論においても主題となるのは特定の人物や事柄であり、反対に一般的、概念的なものについて問うのはむしろ哲学の役割と考えられていた。

このような個別あるいは特定と一般の区別はキケロのなかで頻繁に言及される。たとえば『トピカ』においては前者をギリシャ人たちは « hypothesis »、ローマでは « causa » と呼び、後者を « thesis »、そして « propositum » と呼ぶというように紹介されている[(17)]。クインティリアヌスの巧みな要約を見てみよう[(18)]。

> 問題には無限定のものと限定されたものがある。無限定のものは人物、時間、場所、その他同様のものと無関係であり、両方の観点から論じられるものである。これをギリシャ人は « thesis » と呼び、キケロは « propositum » と呼ぶ。他に市民たちに一般的な問題、哲学的な問題もこれに当てはまる。
>
> 他方、限定のものは事柄、人物、時間、その他を含んだものであり、ギリシャたちは « hypothesis »、

我々ローマの人間は « causa » と呼ぶ。これらすべての限定された問題はほとんどが人物と事柄をめぐって成立しているように思われる。

ここでいう一般的な問題とは、国家や市民生活に関わる事柄、哲学的問題などすべての人間にあてはまるものを意味する。A. Michel が見事に示したように [19]、キケロはこのレトリックと哲学二つの領域を両立させ、一般性の次元にレトリックの説得性を見出す。そこで用いられるものこそ、ロキ・コムーネスなのだ。弁論家は特定の問題について論じるなかで、無限定の問題、一般的な次元の話を導入することによって、問われている事柄が単に当事者間に限定したものではなく、その場にいる聴衆全員、あるいは国家全体に関わることなのだと示し、人々の心に訴えかけ、有利な状態で説得へと持ち込む。限定された問題から無限定のものへと移行すること、キケロによればこの一般化こそが弁論の最上の美質であるという [20]。

(b)「二つの哲学の学派に固有 propria duarum philosophiarum」。ここで言われている学派はペリパトス派とアカデメイア派のことであるが、とりわけ後者はアルケシラオスとカルネアデスによる新アカデメイア派を指す [21]。彼らは賛否、是非などの二つの方向から問題を問うことによって、片方の意見の確実性を否定し、より蓋然性の高いものを支持するという方針を採った。この見方は、あらゆる意見を蓋然性のもとで捉える懐疑主義のひとつであり、自分たちの主張が確実で疑いえないものだとする独断主義に対抗するものである。彼らは善や正義といった概念に決定的な定義を与えるのではなく、二つの相反する方向から検討を加えることによって問題をより深く探求し、その結果としていかなる真理にも到達しえないことを示す。実際、ルネサンスにおいてはキケロの『アカデミカ』をはじめとする資料によってこの懐疑主義が知られており [22]、この点においてレトリックと哲学は相補的な関係にあったといえるだろう。

キケロやクインティリアヌスといった古代の弁論術において示されたこのロキ・コムーネスは、それ以降も彼らの著作の伝播や再発見に伴って存続してきた。ルネサンスにおいてもエラスムスとメランヒトンの教育理論のなかでロキ・コムーネスやロクスは引き継がれ、さらには独自の発展や改良を加えられた。そうした教育成果の一つをシェイクスピア『ハムレット』の有名な台詞はあらわしている [23]。

ハムレットの苦悩とロキ・コムーネス

« To be or not to be, that is the question. » おそらくこの世で最も有名な台詞の一つであろうこの問いかけは、ハムレットの苦悩を見事にあらわしたものとして受け取られてきた。しかし実のところ、これは我々が検討しているロキ・コムーネスそのものなのだ。F. Goyet が指摘しているように [24]、ルネサンス後期を生きるハムレットが受けたであろう教育はメランヒトンの影響を色濃く反映したものであり、いくつかの点でその痕跡が認められる。ここでは、我々がすでに整理したような、両方の観点から問題を論じるロキ・コムーネスが適用されているのだ。ところで、この

ロキ・コムーネスの本質は一般化にあり、そこで論じられる問題は特定の条件に関係しない「無限定の問題 quaestio infinita」である。結論から先に言えば、ハムレットはここでそうした問題について問うているのであり、« that is the question » は « that is the *quaestio* » にほかならない。

まずハムレットが置かれている状況を整理しよう。父王を叔父クローディアスに毒殺され、そのうえ王権までも奪われた若き王子にとって問題となるのは、「武器を取って叔父に復讐するか否か」である。これは特定的な問題（quaestio finita / hypothesis）である。もちろん窮地にあるハムレットは武器を取るべきなのだが、この時点ではそれは単なる個人的な復讐でしかなく、場合としては現在の王である叔父を殺すわけなので、ハムレットは反逆者として扱われてしまうだろう。つまり大義名分が彼には欠けており、この問い方には説得力がない。ではどうするか。ルネサンス教育を受けた彼ができるのは、ロキ・コムーネスを導入することである。そうすると問題は、「卑劣な者に対し武器を取るべきか」あるいは「権力簒奪者に対し蜂起すべきか」と一般化される。さらにこれを縮約したのが「そうであるべきか否か To be or not to be」なのだ。この一般性の次元に格上げされた問題は、ハムレットに復讐の正当性を与えるだろう。単に親の仇を取るための殺人は許容されないが、不当に奪われた王権を取り戻すという名目であれば、行為に説得性を持たせることができるのだ。つまり、ハムレットは、みずからの「生きるべきか死ぬべきか」を問うているわけではなく、一般性の次元において「正当性を持った復讐ができるかどうか」を問題としているのだ[25]。

また、この一般的問題は実践や行動を促す形式としても知られている[26]。本来ならばこの問いかけから結論を導出し、行動に移すべきであるが、ハムレットはなかなか復讐を実行へと移さない。これはこのロキ・コムーネスの懐疑主義的側面があらわれていると見ることもできるだろう。つまり、ハムレットはロキ・コムーネスによって一般的な次元でみずからの正当性を論じたものの、判断を保留してしまうのだ[27]。結果として、叔父クローディアスを殺すものの、恋人、母、恋人の兄、そして自分自身さえも死ぬことになる。ハムレットの優柔不断、あるいは復讐を果たすべきにもかかわらず、学校で教わったロキ・コムーネスの方法の復習をしているという知識人的滑稽さこそが、「悲劇」なのだ。ハムレットの苦悩はまさしく両方の観点からのロキ・コムーネスであり、結果としては悲劇的であるが、彼はルネサンス教育の成果の一つを体現している。

討論教育から『エセー』へ

モンテーニュの場合はどうだろうか。彼もまたハムレット同様、ルネサンス教育を十分に受けていた。すでに指摘されているとおり[28]、ギュイエンヌ学院における「討論 Disputatio」の授業を通じてモンテーニュはこのロキ・コムーネスを学んだであろう。この学院をはじめ、ルネサンス期の人文主義的教育では、生徒たちの競争意識を刺激することで学習効果を高めるような指導が行われていた。その一環として、クラスの生徒を二組に分け、お互いに学んだ学科の内容やときとしては聖書の教理をも互いに論じあい、教師がどちらの論証がより説得的であるかを判定す

る討論の授業が頻繁に行われていた。この知的競技は生徒たちに学習内容をより深く理解し、記憶に定着させるのに役立っただけでなく、書物から学んだ理論的な知識を実践で用いることを教えた。また、見出し語のもとに引用や範例を並べたノートはこうした訓練と補完的な関係にある。生徒は自分の主張や論証をより説得力のあるものにするために、普段の読書や授業で書き留めておいた素材を用いるのである。

弁論家が一人で両方の観点から論じるのを、この「討論」では実際に生徒たちを二手に分け、行わせている。こうした訓練を経て、生徒たちはいずれ自分ひとりの力でこのロキ・コムーネスを扱えるようになるだろう。こうした訓練を受けた人文主義者たちはたとえば高等法院の審議において、あるいは宮廷での称賛弁論において、また聖職者たちは説教において両方の観点からのロキ・コムーネスと引用文を蓄えるノート作成の方法を活用したであろうことは容易に想像がつく。それは口頭での弁論だけでなく、執筆活動にも当然適用されていただろう。

ではモンテーニュの『エセー』のどこに、この方法の適用が見られるだろうか。たとえば第一巻 1 章「人は様々な方法によって同じ結果に達する」の冒頭では、「我々に対して怒った人たちが復讐を手にして我々を思うままにできるとき、彼らの心をやわらげるもっとも普通の方法は、降伏し、彼らの同情と憐憫を動かすことである。しかしこの方法とはまったく反対の、勇敢さと不屈さがしばしば同じ結果を生んだこともある[29]」、というように、モンテーニュは一般的な方法を述べたあと、これと反対の方法を呈示し、その例証を加えていく。これと似た論の進め方をしているのが、第二巻 15 章「我々の欲望は困難に出会うと増大すること」と 33 章「スプリナの話」であろう。どちらもある意見をはじめに紹介し、その後反対の意見を述べるという形式をとっている。

また、第一巻 47 章「我々の判断の不定なことについて」では「何事にも賛否両論いくらでも言える il y a prou de loy de parler par tout, et pour et contre[30]」と冒頭で述べ、以下に述べる範例のそれぞれに賛否両論の立場からコメントをくわえている。さらに第一巻 5 章「包囲された軍の大将は交渉のために城を出るべきか」は章タイトルがまさに賛否両論から論じられる問題となっている。モンテーニュは両方の観点から意見を述べるが、どちらかを選択して支持することはない。これについて彼は次のように言う。「どちらの側につくとしても、人間の事柄には我々を確信させるような真実らしい理由がいくらでも見つかる。（中略）また、どちらの側であれ、その側を支持するに足る理由と真実らしい根拠ならば、常にいくらでもあてがうことができる。それゆえ、疑惑と選択の自由を私のところに保留しておいて、時機が来て急き立てられるまで待っている[31]」。この態度はあらゆる意見に蓋然性を認め、判断を保留する懐疑主義に通底するものである。

しかし、ここまで挙げた例を見る限り、モンテーニュはたしかに賛否両方の観点から語ることはあるにしても、ハムレットの場合のような決定的な使い方をしているようには見えない。その理由はやはりこれらがモンテーニュの判断力の「試し」を記録したものにすぎず、読者に対して、なにか意見、あるいは主張を説得的に論じているわけではないからであろう。そう考えるとむし

ろ我々が目を向けるべきは「レーモン・スボン弁護」となる。この章でモンテーニュは、スボンの主張を弁護するだけでなく、同時に学問や知識の「虚しさ」、人間の「思い上がり」など、いわば一般的な問題について論じているからだ。

「レーモン・スボン弁護」における « in utramque partem »

ほかのところでは決して見せないような慎重さでモンテーニュはこの章をはじめる。彼はまず学問に対して距離を置く。これにより、のちほど論駁の対象となる「新種の博士連中」に対して思う存分非難を浴びせることが可能になる。さらに、モンテーニュは自分の父の学者たちに対する態度――学問に極端な価値を与え、博識な人々との交際を有難がり、さらには彼らの言葉をまるで神託のように受け取る――を暗に皮肉り、批判する。この距離の取り方は、理性ではいかなる確実性にも到達できないという結論を導出するために必要となるだろう。モンテーニュは何気なくスボンの著作を手に入れた来歴、スボン自体の評価などを語ってはいるが、実のところ、のちの論証の展開を念入りに準備しているのだ。

スボンの説はちょうどルターの新説が欧州各地を揺るがしはじめた頃に、博学なピエール・ビュネルがモンテーニュの父のもとへ持ってきたものであり、モンテーニュ自身はそれをほかならぬ父の命令によって翻訳し、出版した。この消極的な弁明は、みずからにこの著作に対する責任が降りかかってこないようにする政治的な振る舞いであると考えられるが[32]、同時にそれはモンテーニュに弁護人という客観的な立ち位置を与えるだろう。つまり、自分の訳業を消極的にとらえることで、スボンの説に向けられた批判に応戦しつつも、危険な神学的問題に立ち入ることなく、その正当性を弁護できるのだ。

こうした慎重な叙述とは打って変わって、モンテーニュはスボンの弁護を開始するやいなや、相手の論駁とみずからの主張の説得へ急ぐ。この性急さこそ、この章の論の構成をわかりにくくし、さらには論旨と主張が矛盾さえしているように見せている。ただ、我々の観点からするとここにロキ・コムーネスがあらわれている。

スボンの弁護をするのであれば、まずはスボンの説の正当性、つまり「スボンが人間理性を信仰に適用したのは正しいか否か」といった特定の問題（hypothesis / quaestio finita）を問うべきであろう。しかしながら、モンテーニュはいきなり問題を一般化する。つまり彼が問うのは、「人間理性を信仰に適用すべきか」である。彼はスボンに寄せられた批判に応えるという形でこの問題を論じるが、これは、ほとんど無名のスボンとその著作の評価とは関係なく[33]、スボンの説それ自体を問題にすることを可能にしているという点で、非常に戦略的である。もともと政治的配慮からスボンの名を前面に出したくないモンテーニュにとっては、この一般化は弁護にうってつけの方法であろう。

さて、問題は是非両方の観点から論じられる。一方は、「理性を信仰に適用すべきである」という立場であり、これを立証すれば弁護は成功となる。他方は、「理性を信仰に適用すべきでない」

という立場である。モンテーニュはこちらの立場にも信仰心という点で正当性があることを認める。つまりここで提出された二つの意見のどちらにも価値を認めているのである。だが、ここで判断を保留していては弁護にならない。そこでモンテーニュは信仰のみで真理にたどり着くことはないと言い、理性を伴わせる必然性を主張する。そしてそれ以上の神学的問題には立ち入ることを避ける。この時点で第一の批判、つまり後者の立場を否定することに成功している。それゆえ、スボンの説である前者の命題は弁護されたといえる。

だが現実はそう甘くない。第二の批判、スボンの言う理性は弱すぎるというものに対して弁護を行わなくてはならない。ここまでは、理性の適用に賛成する側も、反対する側もどちらもキリスト教徒であることが前提であったが、ここからはより大きな区分となる。もし真理が理性によって到達できるのであれば、キリスト誕生以前のソクラテスやカトーなどのすぐれた人々も真理に到達していたはずであるが、実際のところはそうではない。それゆえ、キリスト教の真理に到達するためには理性ではなく、神の恩寵が必要なのだ。要するに問題は、神の恩寵にあずかるキリスト教徒か、それとも理性の力を信じる無神論者かというものになる。これはつまるところ、「キリスト教徒であるべきか否か」« To be (christian) or not to be, that is the question » にほかならない。

ここまでくると問題の性質自体が変わってくる。キリスト教徒にとって、「キリスト教徒であるべきか否か」を両方の観点から考えることは受け入れられない。むしろ、無神論者たちの思い上がり、つまり人間理性の「傲慢さ」という悪徳を非難しなくてはならない。したがって、問題探求のためのロキ・コムーネス、「両方の観点から in utramque partem」論じる方法はもはや必要ない。新たに求められるのは、これ以上議論の余地のない事柄を増幅し、強調する方法（certae rei amplificatio）、つまりエラスムスが上で挙げた (ii) の増幅拡充のロキ・コムーネスである。

＊＊＊

ロキ・コムーネスが導入されるのは重大な局面にほかならない。それはどんな主題にも、どのような状況にも適用される方法ではないのだ[34]。それほど、この一般化という方法は効果的であり、同時に聴衆の感情に訴えかけるものであるゆえに、危険を伴うものでもある。ハムレットは自分の運命を左右する最も重要な問題を論じるのにこの方法を用いた。しかし生来のメランコリーと、両方の観点から蓋然的に問いかける方法があいまって、彼の決断を先延ばしにし、結果として多くの悲劇を引き起こした。他方のモンテーニュはどうかといえば、あたかもスボンのことなど忘れてしまったかのように、一般的、さらには宗教戦争のさなかであるという状況下では、このうえなく重要かつ危機的な問題へと急ぐ。もちろん賛否両論、是非を問うロキ・コムーネスによって一般化された問題を論じはするものの、彼にとっては信仰と理性の関係性を考察することよりも、忌まわしい無神論、理性の傲慢さを打ち砕くことが急務となる。この時点でスボンの説を越えて、モンテーニュはキリスト教信仰の弁護人へと変身するのだ。キケロが『ミロー弁護』

においてミローの正当防衛を弁護する以上に、国家の防御、反逆者への処罰の正当性を主張するのと同様に、モンテーニュも恩寵に基づいたキリスト教信仰の防御ならびに無神論者たちを論駁しなくてはならない。したがって、「レーモン・スボン弁護」の章は、疑わしい事柄の拡充から明白な悪徳の非難へと弁論の調子を変える。ここに矛盾や逆説はない[35]。たしかに、弁論の結論部で行なうような一般化を冒頭からしてしまうという性急さは認められるものの、弁護人モンテーニュはきわめて正統的に、一貫した弁論をおこなっている。次に我々が見るのは、一般化のあと論点を増幅させ、強調するのに、彼がどのような方法を用いるのかである。

注

(1) ルネサンス期の精神形成の方法として A. Buck は「模倣」と「ロキ・コムーネス」を挙げる « Die 'Studia Humanitatis' und ihre Methode », in *BHR*, t. XXI, 1959, pp. 273-290.

(2)「キケロ主義論争」とエラスムスの思想のモンテーニュへの影響については、M. Magnien, « Un écho de la querelle cicéronienne à la fin du XVIe siècle : éloquence et imitation dans les *Essais* », in *Rhétorique de Montaigne*, (éd.) Lestringant, H. Champion, 1985, pp. 85-99 ; *id*., « 'Latiniser en Françoys' : citation et imitation dans les *Essais* », in *Montaigne in Cambridge, proceedings of the Cambridge Montaigne Colloquium 7-9 April 1988*, ed. Philip Ford and Gillian Jondorf, Cambridge French Colloquia, 1989, pp. 7-23. また、この問題について我々はすでに検討した。Yoshio Yamamoto, « Citation et invention dans les *Essais* de Montaigne », *Études de langue et littérature françaises*, nº 118, 2021, pp. 3-18.

(3) ロキ・コムーネスの方法について簡潔で要を得た説明をしているのが、A. Blair, « Bibliothèques portables : les recueils de lieux communs dans la Renaissance tardive », in *Le pouvoir des bibliothèques : La mémoire des livres en Occident*, sous la direction de Marc Baratin et Christian Jacob, Paris, Albin Michel, 1996, pp. 84-106. また教育現場における適用については、A. Moss, *Printed commonplace-books and the structuring of Renaissance thought*, Oxford, Clarendon Press, 1996, ch. 6, pp. 134-185.

(4) こうした指摘は P. Porteau, *Montaigne et la vie pédagogique de son temps*, Paris, Droz, 1935, pp. 190-208 ; P. Schon, *Vorformen des Essays in Antike und Humanismus : ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte der* Essais *von Montaigne*, Wiesbaden, F. Steiner, 1954, pp. 63-74 ; Buck, *art. cit*., pp. 188-189 によってなされている。

(5) Cf. *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., Paris, Gallimard, 2007, III, 13, 1124, « Je laisse aux artistes, et ne sçay s'ils en viennent à bout, en chose si meslée, si menue et fortuite, de renger en bandes, ceste infinie diversité de visages ; et arrester nostre inconstance, et la mettre par ordre. Non seulement je trouve malysé, d'attacher nos actions les unes aux autres : mais chacune à part soy, je trouve malaysé, de la designer proprement, par quelque qualité principale : tant elles sont doubles et biggarées à divers lustres ».

(6) エラスムスとメランヒトンの「ロキ・コムーネス」に対する解釈の違いについてはすでに他のところで検討した。拙論、「『ロキ・コムーネス』の展開――エラスムス vs メランヒトン」、『早稲田大学文学研究科紀要』第 67 輯、2022 年 3 月刊行予定。

(7) 例を挙げるならば、M. Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009 (3e éd.), p. 98 ; *id*., « Genèse de l'épistolographie classique : rhétorique humaniste de la lettre, de Pétrarque à Juste Lipse », in *RHLF*, nov.-déc., 1978, nº 6, p. 893, n. 25, « La rhétorique des *Essais* est toute érasmienne. » ; M. Magnien, « Montaigne et Érasme : Bilan et Perspectives », in *Montaigne and the Low Countries (1580-1700)*, edited by P. J. Smith, Brill, 2014, pp. 17-45.

(8) III, 12, 1103, « Ces pastissages de lieux communs, dequoy tant de gents mesnagent leur estude [...]. » この箇所の « lieux communs » は「見出し語」ではなく「引用句」それ自体を指している。この部分の分析は F. Goyet, « Montaigne et les recueils de lieux dits *communs* », dans *Normativités du sens commun*, Claude Gautier et Sandra Laugier (dir.), Paris, PUF, 2009, pp. 51-93.

(9) ロキ・コムーネスのノートは原典を所有できない者（主として学生）にとって欠かせない学習ツールであった。J.-Cl. Margolin, Jan Pendergrass et Marc Van der Poel, *Images et lieux de mémoire d'un étudiant du XVIe siècle. Étude, transcription et commentaire d'un cahier de latin d'un étudiant néerlandais*, Paris, Guy Trédaniel Éditeur, 1991, pp. LXVI-LXXIV. を参照のこと。モンテーニュと読書行為の関係について興味深く論じているのが、T. Cave, « Problems of Reading in the *Essais* », in *Montaigne : Essays in memory of Richard Sayce*, eds. I. D. Mcfarlane and I. Maclean, Oxford, Clarendon Press, 1982, pp. 133-166.

(10) Goyet, *art. cit*., pp. 58-59. Cf. *Les Essais*, I.24.141, « Je m'en vay escornifflant par-cy par-là, des livres, les sentences qui me plaisent ; non pour les garder (car je n'ay point de gardoire) mais pour les transporter en cettuy-cy [...].» この「保管庫 gardoire」はロキ・コムーネスのノートだと理解してよいだろう。

(11) Érasme, *De ratione studii*, éd. J. Cl. Margolin, dans *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami : recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata*, Amsterdam : North-Holland, 1969-, (désormais ASD), I-2, p. 119, « [...] si quaedam breuiter sed insigniter dicta, velut apophthegmata, prouerbia, sententias, in frontibus atque in calcibus singulorum codicum inscribes, quaedam anulis aut poculis insculpes, nonnulla pro foribus et in parietibus aut vitreis edam fenestris depinges, quo nusquam non occurrat oculis, quod eruditionem adiuuet. » ; A. Legros, *Essais sur poutres : peintures et inscription chez Montaigne*, Paris, Klincksieck, 2000, pp. 19-25 et en particulier, p. 23, n. 14, « La ''librairie'' de Montaigne présente, quant à elle, une collection de *loci communes sive sententiæ* au sens d'Erasme. »

(12) Ex. F. Brahami, *Le Scepticisme de Montaigne*, Paris, PUF, 1997 ; *id*., *Le travail du scepticisme. Montaigne, Bayle, Hume*, Paris, PUF, 2001 ; T. Cave, *Pré-Histoires : Textes troublés au seuil de la modernité*, Genève, Droz, 1999, surtout pp. 23-50 ; S. Giocanti, *Penser l'irrésolution : Montaigne, Pascal, La Mothe Le Vayer. Trois itinéraires sceptiques*, Paris, Champion, 2001 ; G. Paganini, *Skepsis : le débat des modernes sur le scepticisme (Montaigne, Le Vayer, Campanella, Hobbes, Decartes, Bayle)*, Paris, Vrin, 2008 ; (éd) A. Legros et M. L. Demonet, *L'écriture du scepticisme chez Montaigne*, Genève, Droz, 2004 ; M. Conche, *Montaigne et la philosophie*, Paris, PUF, 1996 ; J. P. Dumont, *Le scepticisme et le phénomène : essai sur la signification et les origines du pyrrhonisme*, Paris, J. Vrin, 1972, surtout, pp. 41-49.

(13) 拙論「発想の『場所』から引用の集成へ――トポス、ロキ・コムーネス、詞華集」、*Waseda Rilas Journal*, nº 9, 2021, pp. 221-232.

(14) *Eccelesiastes (libri I-II)*, éd. J. Chomarat, ASD, V-4, pp. 400-402.

(15) Cf. Cicéron, *De l'invention*, II, 48 ; II, 68 において、これ以上議論の余地のない事柄（certae rei）と疑わしい事柄（dubiae rei）をそれぞれ増幅し、強調することの意義が語られている。

(16) *De l'orateur*, III, 107, « [...] alii uero ancipitis disputationes, in quibus de uniuerso genere in utramque partem disseri copiose licet. Quae exercitatio nunc propria duarum philosophiarum, de quibus ante dixi, putatur ; apud antiquos erat eorum, a quibus omnis de rebus forensibus dicendi ratio et copia petebatur ; de uirtute enim, de officio, de aequo et bono, de dignitate, utilitate, honore, ignominia, praemio, poena similibusque de rebus in utramque partem dicendi etiam nos et uim et artem habere debemus. »

(17) *Topiques*, 79.

(18) Quintilien, *L'institution oratoire*, livre III, 5, 5, « Item convenit, quaestiones esse aut infinitas aut finitas. Infinitae sunt, quae remotis personis et temporibus et locis ceterisque similibus in utramque partem tractantur, quod Graeci θέσιν dicunt, Cicero propositum, alii quaestiones universales civiles, alii quaestiones philosopho convenientes [...]. » ; III, 5, 7, « Finitae autem sunt ex complexu rerum, personarum temporum, ceterorumque ; hae ὑποθέσεις a Graecis dicuntur, causae a nostris. In his omnis quaestio videtur circa res personasque consistere. »

(19) A. Michel, *Les rapports de la rhétorique et de la philosophie dans l'œuvre de Cicéron : Recherches sur les fondements philosophiques de l'art de persuader*, Éditions Peeters, 2e édition, 2003, surtout p. 94 *sqq*. ; p. 158 *sqq*. ; p. 213 *sqq*..

(20) *De l'orateur*, III, 120「かくして、このうえなく輝かしい弁論とは、もっとも広い領域に関するものであり、そこで個別的案件から、もっとも一般的な問題へと移行するものだ（Ornatissimae sunt igitur orationes eae, quae latissime uagantur [et a privata] et a singulari controuersia se ad uniuersi generis [...].）。」これについては F. Goyet, *Le Sublime du "lieu commun"*, Paris, Classiques Garnier, 2018, pp. 269-277 を参照のこと。

(21) Cf. *De l'orateur*, III. 80.

(22) これについては C. B. Schmitt, *Cicero Scepticus : A Study of the Influence of the* Academica i*n the Renaissance*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1972.

(23) 我々が参照したのは次のエディションである。W. Shakespeare, *Hamlet*, ed. H. Jenkins, London ; New York, Methuen, 1982. 特にこの箇所に関する注 « Longer Notes », pp. 484-490 を参照のこと。

(24) 以下の記述の多くは次の論文に負っている。F. Goyet, « Hamlet, étudiant du XVIe siècle », in *Poétique*, nº 113, 1998, pp. 3-15.

(25) たしかにテクストだけを見れば、ハムレットは「耐えるべきか、武器を取るべきか」と問い、前者を選択し、現実と折り合いをつけようとしている。しかし彼は一国の王子であり、彼の選択は国家の命運にかかわる。したがって問題は一般的な次元で論じられるべきである。

(26) Cf. Cicéron, *Topiques*, 81-86. « thesis » は二種類に分けられ、一つは理論的なもの、もう一つは実践的なものである。前者は認識を目的とし、例として「法は自然に由来するのか」というのが挙げられる。しかるに後者は義務を喚起したり、感情を動かしたりするものであり、「哲学者は政治に参画すべきか」といった例が挙げられる。弁論の予備訓練のマニュアルであるアプトニオスの『プロギュムナスマタ』においても第十三番目の「一般論題（テシス θέσις）」として紹介され、これは観照的なもの（「神々は存在するか」）と実践的なもの（「結婚すべきか」）に区分されている。また Quintilien, *L'institution oratoire*, III, 5, 6-13. では、実践的なものについて「～か～か」、「～すべきか」という二種類の問い方があると説明されている。

(27) Cf. Goyet, *art. cit*., p. 15, n. 13, « Or, pour trancher le débat abstrait entre les deux attitudes à tenir, et ensuite pour déterminer le juste milieu concret, il faut se faire juge, c'est-à-dire exercer son jugement. Hamlet n'y arrive

pas. En restant dans l'indécision, il montre qu'il manque de *iudicium*. »

(28) P. Porteau, *op. cit*., pp. 158-177 ; L'entrée « collèges (les) au XVIe siècle », in *Dictionnaire des lettres françaises. Le XVIe siècle*, éd. revue et mise à jour sous la direction de Michel Simonin, Paris, Fayard, 2001, p. 285, « Tout comme Ronsard, Montaigne est de disciple de ses régents : le mécanisme de sa pensée est le même que celui des disputes *in utramque partem* pratiquées dans les collèges. Les observations et les réflexions sur l'âme humaine dans ses *Essais* sont ordonnées à la matière des cahiers de lieux communs qu'on apprenait à dresser sur les classes. »

(29) *Les Essais*, I, 1, 31.

(30) I, 47, 301.

(31) II, 17, 693.

(32) Cf. P. Desan, « Apologie de Sebond ou justification de Montaigne ? », in *Montaigne et la théologie*, études publiées sous la direction de P. Desan, Genève, Droz, 2008, pp. 175-200.

(33) M. Simonin によればスボンとその著書はモンテーニュが言うほど知られていたわけではなく、問題の俎上にすらのぼらなかったのではないかと推測している（« La Préhistoire de l'A*pologie de Raimond Sebond* », in *Montaigne*, Apologie de Raymond Sebond. *De la "Theologia" à la "Théologie"*, Paris, H. Champion, 1990, pp. 85-116）。だが J. Céard によれば『エセー』の出版と同時期に似たような議論、つまり理性を信仰に適用すべきかというものが問題になっていたこと、またスボンの説がそこで援用されていたという証言から、スボンに向けられた批判は実際にあったもので、モンテーニュは論争相手をでっちあげているのではなく、現実的に応答しているのだと結論づける。« Montaigne, traducteur de Raimond Sebond », *Montaigne Studies*, Vol. V, 1993, pp. 13-17.

(34) Cf. Cicéron, *De l'orateur*, II. 312、「最も重要で、このうえなく強調され、文体の装飾がなされる問題こそ、弁論における脱線に最も豊かな素材を提供するのだ。そしてそのときこそ、聴衆の感情を高めたり、落ち着かせたりするロキ・コムーネスを用いるときなのだ。」また、Goyet, *op. cit*., p. 276, « Autrement dit, *copia* et généralisation ne s'appliquent pas à n'importe quel sujet, mais seulement à des sujets de première importance. »

(35) しばしば、モンテーニュはこの章のなかでスボンの説を破壊してしまっていると指摘されるが、その破壊的な言説、つまりピュロン派懐疑主義はスボンの説に向けられているのではなく、無神論者たちに向けられていることに注意したい。また、信仰の確立のために、理性の無力さを強調することは、トリエント公会議以後のカトリック側においては正統な立場であり、現代的な「信仰至上主義」とは異なる。これについては、C. Blum, « L'*Apologie de Raimond Sebond* et le déplacement de l'apologétique traditionnelle à la fin du XVIe siècle», in *Le Signe et le Texte : Études sur l'écriture au XVIe siècle en France*, textes réunis par L. D. Kritzman, Lexington, French Forum Publishers, 1990, pp. 161-173 や E. Naya, « Le doute libérateur : préambules à une étude du discours fidéiste dans les *Essais* », in *L'écriture du scepticisme chez Montaigne*, éd. M. L. Demonet et A. Legros, Genève, Droz, 2004, pp. 201-221 を参照のこと。